

| | |
|-------|-----|
| 都道府県名 | 埼玉県 |
|-------|-----|

学校の概要 (平成15年4月現在)

| | | | | | | | |
|-----|-------------|-----|-----|------|-----|-----|--|
| 学校名 | 小鹿野町立小鹿野中学校 | | | | | | |
| 学年 | 1年 | 2年 | 3年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 | |
| 学級数 | 3 | 3 | 3 | 0 | 9 | 19 | |
| 生徒数 | 84 | 110 | 113 | 0 | 307 | | |

実践研究の概要

1. 主題 (テーマ)

「学力向上を目指した学習指導の研究」
 —— 基礎・基本の定着を図り、自ら学ぶ態度と豊かな表現力の育成を目指して ——

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科等

全学年・全教科 観点別学力の評価を生かした授業展開の工夫
 客観的で信頼性の高い評価規準の作成
 評価方法の工夫と指導と評価の一体化 (新しい学習指導要領に基づく適切な評価により生徒の学力を向上させるため)

全学年・全教科 学力の指標となる自己評価票の工夫と基礎・基本を習得させる学習指導の工夫 (自己評価力を高め、確かな学力を向上させるため)

全学年・理科 少人数指導の実施 (個に応じたきめ細かな指導を行うため)

全学年・英語 少人数指導の実施 (生徒の習熟度に差が出やすい教科であるため)

全学年・総合的な学習の時間 豊かな心と表現力を高める総合的な学習の時間の在り方の研究 (教科の学習で培った学力を基盤として、さらに発展的な学力を高めるため・本校生徒の実態から特に表現力を高めることが重要であるため)

2、3学年・選択教科 教科の発展・補充学習 + 表現力を高めることを重視した学習 (興味関心や習熟度に応じた指導を行い、学力を高めるため・本校生徒の実態から表現力を高めることが必要であるため)

全学年・全生徒 家庭学習の充実を図るための取組 (学力向上には家庭学習の充実が欠かせないため)

(2) 年次計画

テーマ
 学力向上を目指した学習指導の研究」
 —— 基礎・基本の定着を図り、自ら学ぶ態度の育成を目指して ——

仮説

以下のことを重点的に研究することで研究課題が達成されるであろう。

(1) 基礎基本の確実な定着を図る。

ア．学力調査による生徒のつまづきや理解不足、不十分な内容について把握する。

平成
14
年度

- イ．学習指導における基礎的・基本的事項を確実に定着させる。
TTによる指導・少人数指導・個別指導・習熟度別指導・繰り返し指導等を実施する。
- (2) 思考力・判断力・表現力を培い、課題解決能力を育成する。
 - ア 体験的な学習や観察・実験など調べ方を身につける学習や地域の人々の参加による学習を行う。
 - イ 指導要録の観点別項目にある〈関心・意欲・態度 思考・判断 技能・表現 知識・理解〉の流れを重視した授業を展開する。
- (3) 自ら学ぶ学習態度を形成する。
 - ア 生徒の思いを生かし、課題解決的な学習活動を展開する。
 - イ 身近な地域素材や人材を活用して、体験的な学習活動を展開する。
 - ウ 個に応じた指導や評価のあり方を工夫する。(自己評価や相互評価を活用する。)
- (4) 目標に準拠した評価(絶対評価)規準で確かな学力形成を図る。
 - ア 評価規準を明確にし、学習意欲を高め、目標を達成するための学習指導の工夫を図る。
 - イ 継続・累積した評価方法を工夫し、個の学力を把握する。

研究内容・方法

- (1) 学力定着度の実態調査・分析
 - ア 学力検査を実施し、生徒の実態を分析し、指導に生かした。
- (2) 基礎・基本の定着を図る学習指導の工夫改善
 - ア 学力の指標となる自己評価票の工夫と基礎・基本を習得させる学習指導の工夫(繰り返し指導等の工夫)
 - イ 少人数指導の工夫(英語・理科)
 - ウ 選択教科における補充、発展学習の指導の工夫
 - エ 学習指導に生かすための学力実態調査の実施・分析
 - オ 家庭学習の充実を図るための実態調査の実施・分析
- (3) 豊かな心と表現力を育てる総合的な学習の時間の研究
- (4) 目標に準拠した評価(絶対評価)規準による学力形成
 - ア 客観性と信頼性のある評価規準の作成と評価の実施
 - 「A」「B」の違いを明確にした評価規準を作成した。
 - 小、中単元毎に評価規準A、Bを設定した評価計画を作成し、評価を実施した。
 - 全職員が評価の意義と重要性を認識し、評定の出し方を統一して一貫性を持って評価を行った。
 - 「評価規準の作成と作成上工夫した点」について研究協議を行い、評価規準の見直しを図った。
 - 学期毎に全教科の評価と評定結果を集計し、学力を分析すると共に、評価や評定の出し方が妥当であったかどうかを検討した。
 - イ 日頃の授業における生徒の学習過程を観る評価の実践
 - 指導案の中に評価計画を入れ、授業中に評価を実施した。
 - 単元評価計画表を作成し、計画に沿って評価を実践した。
 - ウ 評価方法の工夫と改善
 - 評価を実施する上での諸課題を挙げ、協議し、その解消に努めた。

- エ 評価累積簿による評価の蓄積と説明責任化
 評価累積簿に評価結果を蓄積し、生徒や保護者に評価・評定の過程を説明できるようにした。将来的には学習のプロセスが理解できる通知票の作成を目指している。
 単元評価計画を作成し、すべての観点で評価を実施し、単元毎の学力の定着度を把握できるように努めた。
- オ 評価から評定への適切な総括の方法の工夫
 評価から評定への総括方法を統一した。
 1、2学期の評価と評定の結果を分析した。
- カ 観点別学力を高めるための授業の改善・実施
 評価の機能を生かしながら効果的に学力を高める授業展開の基本型を考案し、実践した。
 ・一斉指導、グループ活動、個別指導などの指導形態を工夫すると共に、自己評価カードを活用するなど、生徒の自己評価力の育成に努めた。
 ・単元学習の終わりに学習内容に対する生徒自身による自己評価をもとに繰り返し学習を行った。繰り返し学習では、習熟度別学習や課題別学習等、多様な指導形態を工夫していく。

テーマ

「学力向上を目指した学習指導の研究」

—— 基礎・基本の定着を図り、

自ら学ぶ態度と豊かな表現力の育成を目指して ——

仮説

以下のことを重点的に研究することで研究課題が達成されるであろう。

(1) 基礎基本の確実な定着を図る。

- ア 学力調査により生徒のつまずきや理解不足、不十分な内容について把握する。
- イ 学習指導における基礎的・基本的事項を確実に定着させる。
 学力の指標となる自己評価票の工夫と活用・TTによる指導・少人数指導・個別指導・習熟度別指導・繰り返し指導等を実施する。
- ウ 選択教科における教科学習の補充、発展学習を充実させる。
- エ 家庭学習の充実を図るための手立ての工夫を図る。

(2) 思考力・判断力・表現力を培い、課題解決能力を育成する。

- ア 様々な人とのふれあいや体験学習、自己表現方法の学習と表現活動の場を積極的に取り入れた総合的な学習の時間を展開する。
- イ 表現力を高めることを重視した選択教科の学習を実施する。
- ウ 指導要録の観点別項目にある〈関心・意欲・態度 思考・判断 技能・表現 知識・理解〉の流れを重視した授業を展開する。

(3) 自ら学ぶ学習態度を形成する。

- ア 生徒の思いを生かし、課題解決的な学習活動を展開する。
- イ 指導方法や教材、教具を工夫し、生徒の知的好奇心をそそる授業を展開する。
- ウ 自己評価表の活用により、自己評価力を高める。(自らつまずきに気づき、

課題の解消ができるようにする。)

(4) 絶対評価規準で確かな学力形成を図る。

ア 評価規準を明確にし、学習意欲を高め、目標を達成するための学習指導の工夫を図る。

イ 評価を継続して行い、結果を累積し、個の学力を把握する。

ウ 評価方法を工夫し、指導と評価の一体化を図る。

研究内容・方法

(1) 目標に準拠した評価（絶対評価）による学力形成

ア 観点別学力の評価を生かした授業展開の工夫

(ア) 指導要録の観点別項目にある〈関心・意欲・態度 思考・判断 技能・表現 知識・理解〉の流れを重視した授業を展開する。

(イ) 生徒の実態把握から低い観点別学力を高める授業を展開する。

イ 客観的で信頼性の高い評価規準の作成

(ア) 評価規準の見直しを絶えず行い、単元毎に指導・評価計画を作成する。

ウ 評価方法の工夫と指導と評価の一体化

(ア) 評価規準を明確にし、学習意欲を高め、目標を達成するための学習指導の工夫を図る。

(イ) 小、中単元の学習を〈目標・評価規準の明示 授業における指導 自己評価 繰り返し学習〉の流れで実施する。

(ウ) 学期毎の評価・評定結果を分析し、その結果から低かった観点別学力を高める指導を重点的に行う。

(エ) 継続・累積した評価方法を工夫し、個の学力を把握し、指導に生かす。

(オ) 小、中単元毎の学力の把握に努める。

(2) 基礎・基本の定着を図る学習指導の工夫改善

ア 学力の指標となる自己評価表の工夫と基礎・基本を習得させる学習指導の工夫（少人数指導、習熟度別指導、繰り返し学習等の工夫）

(ア) 自己評価カードを活用し、生徒の自己評価力を高める。

(イ) 英語科と理科において全学年で習熟度別少人数指導を実施する。英語科では、1学級をホップコースとステップ&ジャンプコースの2つの習熟度別クラスに分け、2人の教員が個に応じた指導に努める。理科においても1学級を習熟度別に2つに分け、2人の教員が個に応じた指導に努める。

(ウ) 各教科の学習において、単元学習の終了時に繰り返し学習の時間を設定する。生徒自身の自己評価により、補充・発展学習を行い、個に応じた指導を行う。

イ 選択教科における補充、発展学習の指導の工夫

2、3年生の国語、社会、数学、理科、英語の5教科において、それぞれ補充、発展の2コースを開設する。さらに前、後期の二期制にし、より選択の幅を広げ、教科学習の補充・発展指導を充実させる。

ウ 家庭学習の充実を図るための取組

(ア) 単元ごとの自己評価票による学習状況の振り返りから、家庭学習の目標と内容の明確化に結びつける。

(イ) 家庭生活実態調査を実施し、実態の把握と分析を行い、指導に生かす。

- (ウ) P T Aの母親委員会を中心に保護者への啓蒙を図る。
- エ 基礎・基本の定着に視点をあてたテストの実施・分析
- (ア) 国語、社会、数学、理科、英語の五教科において、短期の評価である単元テスト、中期の評価である学期末のテスト、長期の評価である観点別到達度テストを実施する。生徒に自己評価票とテスト結果を比較させ、観点ごと、項目ごとに達成状況を振り返らせ、解答用紙に反省を記入させるとともに、家庭学習の目的を明確にさせる。また、テスト結果と自己評価票は保護者にも見せて、認印をもらい、提出させる。
- (イ) 国語（漢字）、数学（主に計算問題）、英語（単語）の100題テストを行い、基礎学力を定着させる。
- (3) 豊かな心と表現力を育てる総合的な学習の時間と選択教科の指導の工夫
- ア 人とのふれあいや質の高い体験学習・自己表現方法の指導と表現活動の場を積極的に取り入れた総合的な学習の時間の実施
- (ア) 身近な地域素材や人材を活用して、体験的な学習活動を展開する。
- (イ) 質の高い校外学習を積極的に実施する。
- (ウ) 全学年で表現力を高める指導を実施し、発表会を行う。
- イ 表現力を高めることを重視した選択教科の実施
開設する全学年の全教科において、表現力を高めることを重視した指導を年間指導計画に位置づけ、表現力の向上を目指す。

テーマ

「学力向上を目指した学習指導の研究」

—— 基礎・基本の定着を図り、

自ら学ぶ態度と豊かな表現力の育成を目指して ——

仮説（15年度の研究成果と課題を踏まえて再検討する。）

以下のことを重点的に研究することで研究課題が達成されるであろう。

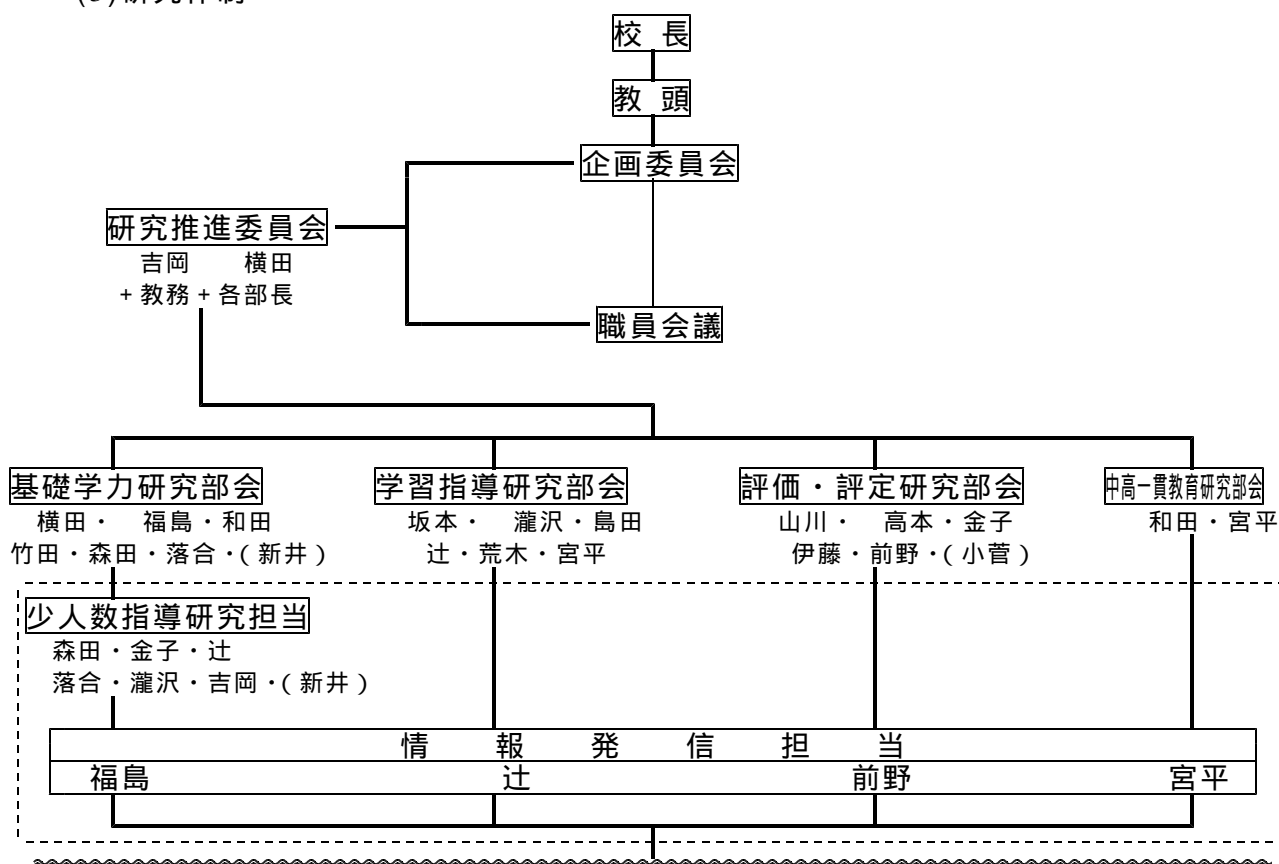
- (1) 基礎基本の確実な定着を図る。
- ア 学力調査による生徒のつまずきや理解不足、不十分な内容について把握し、補充指導を充実させる。
- イ 学習指導における基礎的・基本的事項を確実に定着させる。
TTによる指導・少人数指導・習熟度別指導・繰り返し指導等により個に応じた指導の充実を図る。
- ウ 選択教科における教科学習の補充、発展学習を充実させる。
- (2) 思考力・判断力・表現力を培い、課題解決能力を育成する。
- ア 様々な人とのふれあいや体験学習、自己表現方法の学習と表現活動の場を積極的に取り入れた総合的な学習の時間を展開する。
- イ 教育課程全体を通して表現力を高めることを重視した指導を実施する。
- ウ 観点別項目の中の「高めたい観点別学力」を重視した授業を展開する。
- (3) 自ら学ぶ学習態度を形成する。
- ア 生徒の思いを生かし、課題解決的な学習活動を展開する。
- イ 指導方法や教材、教具を工夫し、生徒の知的好奇心をそそる授業を展開する。
- ウ 自己評価表の活用により、自己評価力を高める。（自らつまずきに気づき、

- 課題の解決ができるようにする。)
- (4) 目標に準拠した評価（絶対評価）で確かな学力形成を図る。
- ア 評価規準を明確にし、学習意欲を高め、目標を達成するための学習指導の工夫を図る。
 - イ 学習過程における評価を通して生徒の学習状況を適切に評価し、指導と評価の一体化を図る。
 - ウ 評価を継続して行い、結果を累積し、個の学力を把握する。

研究内容・方法

- (1) 基礎・基本を定着させる指導の工夫
- ア 学習内容の定着度を見る自己評価に基づく繰り返し学習の充実
 - イ 自己評価票作成の工夫と自己評価能力を高める指導の研究
 - ウ 観点別学力標準検査の実施と分析
 - エ 学力実態分析と家庭学習の習慣化を目指した取組
 - (ア) 生徒の実態調査（学力・学習意欲）等の実施
 - (イ) 学力向上週間を通じた家庭学習の充実のための指導
 - オ 選択教科における教科指導の補充学習・発展学習指導の充実
 - カ 少人数指導・習熟度別指導の研究
 - (ア) 習熟度に応じた指導の工夫と教材開発
- (2) 客観的で信頼性の高い評価の実践
- ア 客観的な評価規準の作成
 - (ア) 観点別学力テストの結果との比較研究
 - (イ) 年間指導・評価計画の見直しと改善
 - イ 評価と評定の研究
 - (ア) 評価・評定結果を生徒の指導に活かす研究
 - (イ) 評価・評定への総括方法の研究
 - ウ 評価実践記録簿の作成～通信票の改善
 - (ア) 評価累積簿の作成と着実な評価累積 <授業中の評価実践>
 - (イ) 単元毎の学力定着度を示す通信票の作成
 - エ 学力向上のための二期制のあり方の研究
- (3) 評価を生かした授業展開の工夫
- ア 評価方法の工夫・改善と指導と評価の一体化を目指した研究
 - イ 高めたい観点別学力向上のための指導過程・指導法の研究
 - ウ 各教科、選択教科、総合的な学習の時間による表現力を高める指導の充実
 - エ 教科指導と関連させての学力向上のための総合的な学習の時間のあり方の研究

(3) 研究体制



内は平成15年度から加えた組織

平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

- (1) 目標に準拠した評価の在り方の理解が深まり、学習過程における評価が実践され、指導の改善が図れた。
- (2) 高めたい観点別学力を向上させるための重点指導が実践され、観点別学力の高まりが見られた。
- (3) 習熟度別少人数指導により基礎・基本の定着が図られ、生徒の学習意欲の高まりが見られた。
- (4) 家庭学習定着を目指した指導により家庭学習の習慣化が図られつつある。

以下に具体的な成果を記載する。

1 観点別到達度学力検査の結果から

昨年度と今年度の結果を比較してみた。(図書文化社CRTより)

各観点ごとのAとBの合計を比較、単位は%

(2年生)

| | | 平成14年度 | 平成15年度 |
|----|----------|--------|--------|
| 国語 | 関心・意欲・態度 | 78 | 89 |
| | 話す・聞く | 87 | 92 |
| | 書く | 87 | 88 |
| | 読む | 83 | 90 |

| | | | |
|----|----------|----|----|
| 社会 | 関心・意欲・態度 | 65 | 88 |
| | 知識・理解 | 34 | 73 |
| 数学 | 関心・意欲・態度 | 84 | 88 |
| 理科 | 関心・意欲・態度 | 84 | 93 |
| | 表現 | 80 | 90 |

2年生は、昨年度英語を受検していない。

(3年生)

| | | 平成14年度 | 平成15年度 |
|----|----------|--------|--------|
| 国語 | 関心・意欲・態度 | 70 | 78 |
| | 話す・聞く | 90 | 98 |
| | 読む | 43 | 98 |
| 社会 | 関心・意欲・態度 | 63 | 93 |
| | 思考・判断 | 41 | 87 |
| | 表現 | 52 | 64 |
| 数学 | 知識・理解 | 52 | 74 |
| | 関心・意欲・態度 | 40 | 44 |
| | 表現・処理 | 35 | 80 |
| 理科 | 知識・理解 | 66 | 78 |
| | 関心・意欲・態度 | 65 | 76 |
| | 思考 | 72 | 95 |
| 英語 | 思考 | 51 | 86 |
| | 表現 | 76 | 81 |
| 英語 | 関心・意欲・態度 | 65 | 92 |

上記の教科・観点で向上が見られた。特に「関心・意欲・態度」の評価は全教科で向上している。このことからどの教科においても生徒の学習意欲が高まっていることがわかる。

2 評価・評定結果から

- (1) 現3年生の昨年度1学期の評価と今年度1学期の評価を比較し、A, B, Cの評価の割合から学力の変容を見た。

以下の教科の観点でAの割合が高まった。

| |
|---|
| 国語：「関心・意欲・態度」、「知識・理解」 社会：「関心・意欲・態度」、「思考・判断」 数学：「関心・意欲・態度」 理科：「関心・意欲・態度」、「思考・判断」 英語：「関心・意欲・態度」、「表現の能力」 |
|---|

単元等に違いがあるので単純に比較はできないかもしれないが、昨年度より生徒はそれぞれの観点で評価Aの人数が増えている。

- (2) 昨年度の累積評価回数と本年度の累積評価回数を比較してみた。
 評価回数を比較すると下表のようになった。

| 観 点 | 評価項目 | 累積回数 |
|----------|--------|------|
| 関心・意欲・態度 | 授業態度 | 8 |
| | ノート | 2 |
| | ワークシート | 2 |
| | 自己評価 | 6 |
| 見方や考え方 | 授業態度 | 4 |
| | ノート | 2 |
| | ワークシート | 2 |
| | 定期テスト | 1 |
| | 定期テスト | 1 |
| | 自己評価 | 6 |
| 表現・処理 | 授業態度 | 8 |
| | ノート | 2 |
| | ワークシート | 2 |
| | プリント | 2 |
| | 定期テスト | 1 |
| | 定期テスト | 1 |
| 知識・理解 | 授業態度 | 4 |
| | ノート | 2 |
| | ワーク | 2 |
| | 定期テスト | 1 |
| | 定期テスト | 1 |
| | 自己評価 | 6 |

| 評価項目 | 累積回数 |
|-------------|------|
| 授業中の観察 | 4 |
| ノートの記述内容 | 2 |
| ワークシートの記述内容 | 2 |
| 定期テスト | 2 |
| 挙手・発表 | 2 |
| ノート | 2 |
| 単元テスト | 1 |
| 定期テスト | 2 |
| ワークシートの記述内容 | 4 |
| | |
| ノート | 4 |
| 小テスト | 3 |
| 単元テスト | 1 |
| 定期テスト | 2 |
| ワークシートの記述内容 | 4 |
| | |
| ノート | 4 |
| 授業中の観察 | 2 |
| 小テスト | 3 |
| 単元テスト | 1 |
| 定期テスト | 2 |
| ワークシートの記述内容 | 4 |

累積回数の結果から前年度に比べ、「授業中の観察」や「ワークシートの記述内容」が増えてきている。学習過程における評価の回数が増え、生徒の学習状況を適切に評価しようとしていることが伺える。また、「関心・意欲・態度」の評価については、「授業態度」の評価から「学習内容に対する関心・意欲・態度」を見る評価になっている。目標に準拠した評価の在り方の理解が深まり、学習過程における評価が実践され、指導の改善が図れてきていることがわかる。

3 基礎学力確認テストの結果から

<基礎学力確認テスト（国語）の結果>

第1回は、全員が基礎・補充問題を受ける。基礎・補充問題合格者は、発展問題へと進む。基礎・補充問題不合格者は、再度、基礎・補充問題を受けることになる。

1学年（85人）

| 第1回 | |
|-------|--------|
| 基礎・補充 | 合格 68 |
| | 不合格 13 |
| | 欠席 4 |

| 第2回 | |
|-------|--------|
| 発展 | 合格 46 |
| | 不合格 20 |
| 基礎・補充 | 合格 3 |
| | 不合格 11 |
| | 欠席 5 |

2 学年 (1 1 0 人)

| 第 1 回 | |
|-------|---------|
| 基礎・補充 | 合格 8 9 |
| | 不合格 1 6 |
| | 欠 席 5 |

| 第 2 回 | |
|-------|---------|
| 発 展 | 合格 4 9 |
| | 不合格 3 5 |
| 基礎・補充 | 合格 8 |
| | 不合格 1 1 |
| | 欠 席 7 |

3 学年 (1 1 3 人)

| 第 1 回 | |
|-------|---------|
| 基礎・補充 | 合格 9 6 |
| | 不合格 1 2 |
| | 欠 席 5 |

| 第 2 回 | |
|-------|---------|
| 発 展 | 合格 7 6 |
| | 不合格 1 6 |
| 基礎・補充 | 合格 5 |
| | 不合格 6 |
| | 欠 席 1 0 |

第 1 回の欠席者は、第 2 回で基礎・補充問題を受けている。
 基礎・補充問題は、各学年で身につけてほしい内容で作成した。
 第 2 回までの合格率は、次の通りである。

1 学年 8 3、5 % 2 学年 8 8、2 % 3 学年 8 9、4 %

各学年とも意欲的な取り組みが見られた。今後も、学力向上につながるよう
 に工夫し、実施したい。

4 少人数指導の成果

英語における少人数指導の成果

< 生徒の意識調査アンケート > (アンケート実施：平成 1 5 年 1 0 月 2 9 日)

対象：2 年 B 組 3 3 名
 Hop コース 1 7 名
 Step/Jump コース 1 6 名

| | | そう思う | | どちらかとい うとそう 思う | | どちらかとい えばそう 思わない | | そう思わな い | |
|---|--------------------|------|-----|----------------------|-----|------------------------|-----|------------|-----|
| | | Hop | S&J | Hop | S&J | Hop | S&J | Hop | S&J |
| 1 | あなたは英語が好きですか | 2 | 7 | 1 0 | 7 | 4 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | あなたは英語の授業がわかりますか | 3 | 2 | 8 | 1 1 | 6 | 2 | 0 | 1 |
| 3 | あなたは人前で話をするのが得意ですか | 0 | 3 | 4 | 4 | 7 | 6 | 6 | 3 |
| 4 | 単語が覚えられるようになりましたか | 5 | 1 | 8 | 9 | 2 | 5 | 2 | 1 |
| 5 | 教科書はスラスラ音読できますか | 2 | 2 | 6 | 5 | 7 | 8 | 2 | 1 |
| 6 | 教科書を日本語に訳すのは得意ですか | 0 | 1 | 3 | 6 | 1 0 | 7 | 4 | 2 |
| 7 | 英語の授業は楽しいですか | 7 | 7 | 8 | 9 | 2 | 0 | 0 | 0 |

| | | | | | | | | | |
|----|--------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 授業中、あなたはよく英語を使うようにしていますか | 3 | 7 | 7 | 3 | 6 | 6 | 1 | 0 |
| 9 | 友だちと話したりする、ペア活動は好きですか | 5 | 6 | 8 | 6 | 4 | 4 | 0 | 0 |
| 10 | 外国人がいたら、英語で話しかけようと思いませんか | 3 | 5 | 2 | 4 | 7 | 5 | 5 | 2 |

(考察)

- ・ Hop コース... 学力向上にむけて、コースの目標である英語の「基礎」固めの1つである「単語を覚える」ことができるようになってきていることが分かる。
- ・ Step/Jump コース... 学力向上にむけて、このコースでは言語の使用場面に応じた「表現力」の育成に努めてきた。クラスの中で英語で使い、表現しようとする態度が育っていることが分かる。

< 習熟度別少人数指導についてのアンケート >

対象：2 学年全員（平成 15 年 9 月当初実施）

| | はい | いいえ |
|--------------------------------|-----|-----|
| 勉強の内容がよくわかる | 81% | 19% |
| わからないことなどは先生に聞きやすい | 61% | 39% |
| コースに分かれて学習することでその教科が好きになってきている | 70% | 30% |

(考察)

- ・ 「習熟度別」という観点から特にHopコースでは今まではあまり授業中に時間の取られてこなかった英語の「基礎」の部分の学習を重点的にできるので「勉強がよく分かる」と感じられるのではないかと。学力向上にむけての「基礎」部分の定着がなされてきている。
Step&Jumpコースにおいては英語の「基礎」のうえに「基本」事項を言語活動などを中心に積み重ねてきているのでそれが定着し、「よく分かる」という声につながっているのではないかと。学力向上にむけての「基礎・基本」、「表現力」の基礎の育成がなされてきている。
- ・ 「少人数」という観点からあまり緊張せず、わからないことは先生に聞けるのだろう。また、友人間での学びあいも見られる。「自ら学ぶ」態度の育成が「学力向上」へつながる。
- ・ それぞれのコースは生徒達の実態によりあった教材開発・指導に努めている。そのことで生徒の学習に対する関心・意欲・態度が高められつつあるのではないかと。また、コースに分けたことで、生徒が自分が必要とする指導を受けられることは生徒の学力向上につながると考えていいだろう。

理科における少人数指導の成果

- a 等質少人数指導・TT（ティームティーチング）指導についてのアンケート結果対象：2学年全員（平成15年9月当初実施）

| | はい | いいえ |
|--------------------|-----|-----|
| 勉強の内容がよくわかる | 81% | 19% |
| わからないことなどは先生に聞きやすい | 61% | 39% |
| 先生や友達の話をよく聞いている | 76% | 24% |

（考察）

- ・ 少人数指導・TT指導では、一斉指導よりも学習内容がよくわかると思っている生徒が多い。これは、一斉指導に比べて生徒一人一人に発問や指導を行いやすいことによるものと考えられる。「分かる」と意識することにより、以後の授業で【関心・意欲・態度】の向上が期待できる。
- ・ 教師の指導や友達の意見をよく聞くことができると答えた生徒が多い。複数の教師で指導することによってグループでの話し合い活動もより活発になり【科学的な思考】の向上が期待できる。

- b 習熟度別学習指導についてのアンケート
対象：2学年全員（平成15年9月当初実施）

| 補充コース選択生徒 | はい | いいえ |
|-----------------|------|-----|
| 今回のコース選択は納得できたか | 94% | 6% |
| 理解は深まったか | 100% | 0% |
| 今後もコース別を希望するか | 100% | 0% |

| 発展コース選択生徒 | はい | いいえ |
|-----------------|------|-----|
| 今回のコース選択は納得できたか | 90% | 10% |
| 理解は深まったか | 85% | 15% |
| 今後もコース別を希望するか | 100% | 0% |

（考察）

- ・ 発展と補充のコース選択は生徒の希望どおりにしているが、多くの生徒が自分の選択に満足し、納得している。「納得していない」と回答した生徒の中には、学習内容の違いに不満を感じているものがいた。
- ・ 発展コースでは、日頃から質問や発言、実験操作で周囲に遠慮をしている生徒が、意欲的に学習に取り組むことができ、【関心・意欲・態度】の向上が期待できる。また、より高度な技能や知識を得ることもできるので、【技能・表現】と【知識・理解】の向上も望める。
- ・ 補充コースでは、学習内容を復習することにより、基礎・基本の確実な定着を図ることができる。観察・実験においても、基礎・基本的な技能の確実な習得を目指すことが可能である。
このことから【技能・表現】【知識・理解】の観点の効果的な向上が望める。
- ・ 全ての生徒が「今後もコース別学習を希望」しているのは、生徒自身が以上の効果を体感しているからであると考えられる。

5 表現力の向上について

話し合い活動を通して表現力を高めることにした。MD法とジグソーパズル的話し合い法とディベートを行った。

MD法実施 2003.4.15

単位%

| 意見を言うことは | 緊張する | 少し緊張する | あまり緊張しない | 緊張しない |
|----------|------|--------|----------|-------|
| 授業前 | 38.8 | 33.3 | 16.6 | 11.1 |
| 授業後 | 1.0 | 2.7 | 33.3 | 58.3 |

MD法を実施することで、「意見を言うこと」に対して、生徒の緊張を和らげる効果があった。

さらに、MD法を実施してから1週間後にジグソーパズル的話し合い法を行った。

ジグソーパズル的話し合い法実施 2003.4.22

単位%

| 意見をいうのは | やはり嫌だ | どちらかと言えば嫌だ | そんなに嫌ではない | 嫌ではない |
|---------|-------|------------|-----------|-------|
| 授業前 | 6.0 | 25.2 | 47.5 | 23.2 |
| 授業後 | 8.1 | 15.1 | 43.4 | 31.3 |

さらにジグソーパズル的話し合い法を行うと、「意見をいうのは嫌だ」という生徒が少なくなるという成果が表れた。

これらの話し合い活動の訓練を通して、生徒の自己表現力（発表力）が高まった。11月に実施した「総合学習発表会」や文化祭における発表等において堂々と自分の考えや意見を発表できる生徒が増えた。

6 選択教科の指導の成果

今年度、前期の学習について、次の項目で2回（5月、10月）アンケートを実施した。内容は、表現力養成期間についての質問を中心とした。

わたしは、自分の気持ちや考えを文章で表現することは得意です。
わたしは、自分の気持ちや考えを人前で発表することは得意です。
わからないことがあった時は、そのままにしないで人に聞いたり、調べたりします。
進んで手を挙げて発表できます。
発表するときは、緊張せず、発表することができます。

< 集計結果の例 >

| 2年国語補充 | 5月 | | |
|----------|----|----|-----|
| | は | い | ふつう |
| 文章表現できる | 2 | 12 | 10 |
| 人前で発表できる | 2 | 8 | 14 |

| 10月 | | |
|-----|----|-----|
| は | い | ふつう |
| 3 | 18 | 2 |
| 8 | 14 | 1 |

| | | | |
|--------|---|----|----|
| 調査できる | 5 | 17 | 2 |
| 進んで挙手 | 2 | 10 | 12 |
| 緊張せず発表 | 3 | 11 | 10 |

| | | |
|---|----|---|
| 8 | 13 | 2 |
| 0 | 15 | 7 |
| 4 | 15 | 4 |

| 3年理科補充 | 5月 | | |
|----------|----|----|-----|
| | は | い | ふつう |
| 文章表現できる | 1 | 16 | 9 |
| 人前で発表できる | 0 | 10 | 16 |
| 調査できる | 4 | 19 | 3 |
| 進んで挙手 | 1 | 13 | 12 |
| 緊張せず発表 | 3 | 16 | 12 |

| 10月 | | | |
|-----|----|-----|-----|
| は | い | ふつう | いいえ |
| 6 | 21 | 1 | |
| 5 | 21 | 2 | |
| 15 | 11 | 2 | |
| 1 | 18 | 6 | |
| 3 | 21 | 2 | |

| 3年英語発展 | 5月 | | |
|----------|----|----|-----|
| | は | い | ふつう |
| 文章表現できる | 3 | 15 | 4 |
| 人前で発表できる | 1 | 13 | 8 |
| 調査できる | 11 | 8 | 3 |
| 進んで挙手 | 4 | 15 | 3 |
| 緊張せず発表 | 1 | 15 | 6 |

| 10月 | | | |
|-----|----|-----|-----|
| は | い | ふつう | いいえ |
| 7 | 13 | 1 | |
| 4 | 13 | 4 | |
| 13 | 8 | 0 | |
| 3 | 15 | 3 | |
| 6 | 13 | 2 | |

あなたは、選択教科で何を学ぶことができましたか？（各教科より抜粋）

- ・伝えたいことを、伝えられるようになった。（国語）
- ・自信をもって発表すること。（国語）
- ・文章をまとめる力。（社会）
- ・図形を使用した表現（数学）
- ・グラフの書き方。（理科）
- ・コミュニケーションの方法・人前で話せるようになった。（英語）

平常の授業ではない、特徴のある授業がありましたか？

- ・少人数で、集中して学べた。（国語）
- ・時間を使って、たっぷり調べられた。（国語）
- ・詳しく学べた。・勉強する方法を覚えた。（社会）
- ・楽しく学べた。・質問しやすい。（数学）
- ・苦手なところがよくできた。・パソコンを使った授業。（理科）
- ・高校の先生の授業。（英語）

どの教科においても、表現力養成期間を設定した効果があらわれている。今後もこの結果を踏まえて、より効果的な選択教科の学習を目指して実施していく予定である。

2. 今後の課題

- (1) 学習過程における評価方法のさらなる工夫と改善
- (2) 観点別学力の向上を目指した授業展開の工夫
- (3) 単元毎の学力の的確な把握と単元毎の評価結果を載せた通信票の作成
- (4) 選択教科による各教科の補充・発展学習の充実
- (5) 教科指導との関連させた総合的な学習の時間の充実
- (6) 学力向上のための学習環境整備（家庭学習の定着、二期制の導入等）の充実
学習状況の適切な評価による指導と一体化を通じた授業改善
自己評価カードの活用による自己評価能力の向上
選択教科、総合的な学習の時間の充実
通信票の改善、二期制の導入
家庭学習の充実

学力把握のための学校の取組について

- (1) 各教科の観点別評価の結果分析
学期毎の全教科における観点別評価と評定結果を集計し、学年生徒の評価A、B、Cの割合の推移、学力の高まりを見る。（毎学期末に実施）
- (2) 100題テスト（漢字・英単語・計算問題）の実施と分析
基礎学力の定着を目指して実施している。100点満点で80点以上を合格とし、合格を目指して再テストを行う。漢字100問テスト（1学期）
英単語100問テスト（2学期） 数学100問テスト（3学期）
- (3) 定期的な学力水準検査の実施（観点別到達度学力検査 図書文化社CRT）
国語、社会、数学、理科、英語の観点別学力を全国平均と比較し、定着度を見る。
全校生徒対象 4月実施
- (4) 埼玉県国語、数学、英語教育研究会による学力調査問題の実施
主要3教科の学力定着度を全県平均と比較する。
3教科とも全校生徒を対象に実施
国語10月、数学1月、英語1月実施
- (5) 単元末の自己評価カードの活用
全教科で個々の生徒の単元の学習内容の定着度や学習への意欲の高まりを見る。
単元末毎に実施
- (6) 少人数指導実施教科における生徒の学習意欲・態度のアンケート調査の実施
理科と英語科による少人数指導に対する生徒の意識を調査する。
2、3年生対象に9月に実施

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

- (1) 研究発表会を開催しての研究成果の普及
ア 学力向上フロンティアスクール研究発表会
11月18日実施 本校を会場として授業を公開するとともに中間発表として本校の研究の成果を発表した。
参加教員等 秩父郡市内小中学校39名 県内中学校10名
県外中学校4名 郡市教育委員会3名
管外教育委員会28名 県内高等学校2名 合計82名

イ 秩父地区学力向上研究協議会

1月14日実施 本校の研究の成果を普及するために実施した。秩父地区の小中学校から各校1名、管外の学校からも希望者には公開した。授業を公開するとともに、本校の研究実践内容を紹介し、研究協議を行った。

参加教員等 秩父郡市内中学校18名 秩父郡市内中学校小学校32名
管内教育委員会 3名 秩父教育事務所3名 合計56名

(2) 教育課程地区研究協議会における事例提案者としての発表を通じた普及

7月13日実施 秩父地区の中中学校から各1名参加

(3) 研究内容を冊子等へ掲載することによる普及

ア 研究紀要を作成し、地区内の全小中学校に配布した。(11月)

イ 小鹿野町教育研究冊子「小鹿野教育」へ研究内容の概要を掲載した。(1月)

ウ 秩父地区学力向上研究協議会実践事例集へ本校の研究実践内容を掲載した。
(2月)

エ 埼玉県学力向上研究協議会「実践事例集」へ本校の研究実践内容の一端を掲載した。(2月)

オ 秩父地区教科研究協議会研究集録に本校の研究内容の一部を掲載する。(数学・英語 3月)

カ 日本教育新聞に本校の研究の取組を掲載した。(11月)

キ 学校便りやPTA便りに研究内容を掲載した。(学校便りは毎月発行)

ク 本校の研究内容や研究の成果を掲載した「学力向上フロンティア便り」を発行し、校内に掲示するとともに保護者や地域に配布した。(7月、11月、12月、1月)

(4) 他校からの視察を受け入れ、本校の研究内容を紹介することによる普及

6月(茨城県那珂湊中)、7月(鴻巣中)、1月(広島県能見中)、
2月(福島県稲田中、嵐山町立菅谷中)

(5) ホームページに本校の研究内容や成果を掲載することによる普及

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無